

No.7, November 2015

Research Center for Cooperative Civil Societies,  
Rikkyo University

## CONTENTS

- ▶鶴見良行文庫、これまでとこれから
- ▶新しく公開しました／利用案内／問い合わせ先／アクセスなど
- ▶公開講演会「フィリピン社会の現在：鶴見良行を基点にして」参加記／来館者よりひとこと

## 鶴見良行文庫、これまでとこれから

平野 泉(アーキビスト、立教大学共生社会研究センター)



共生社会研究センター（以下、「センター」）が所蔵する「鶴見良行文庫」は、市民運動家・ジャーナリスト・アジア研究者として知られる鶴見良行（1926年～1994年）さんが残した貴重な蔵書・写真・資料などの個人コレクションです。ご遺族のご厚意により埼玉大学共生社会研究センターに寄贈された資料群が「鶴見良行文庫」（以下、「文庫」）として正式公開されたのは2005年のこと。研究室3室分のスペースに、鶴見さんの書棚そのままの配列で並べられた文庫の空間は、埼玉大学共生社会研究センターの他の書庫とはちがつた独特な雰囲気があり、ドアを開けると鶴見さんの書斎に足を踏み入れるような感じがしたのを覚えています。その後2012年3月に、文庫全体は立教大学に移送されました。当時のセンターにはそれを配架・公開するためのスペースがなく、文庫の全資料は箱詰めされたまま学内の教室に分散して保管され、センタースタッフも見ることができない状態になってしまったのです。3年後の2015年3月、センターが現在のメザーライブラリー記念館新館に移転してようやく、文庫の資料は開封・配架され、利用可能となりました。

文庫には、①鶴見さんが収集し、丹念に読み込まれた蔵書約7,000冊、②日本・アジアの各地で撮影された貴重な写真約45,000点、③文献やアイディアなどを書きとめたカード約15,000枚、④フィールドノート29冊、⑤自著約30冊、⑥主題別ファイル314点など、いかにも個人の文庫らしい資料のほか、ナマコの標本などのモノ資料も含まれています。このうち①、②は「鶴見良行文庫デジタルアーカイブ」(<http://tsurumi.rcccs.rikkyo.ac.jp/>)から検索可能で、写真についてはオンラインでも閲覧でき

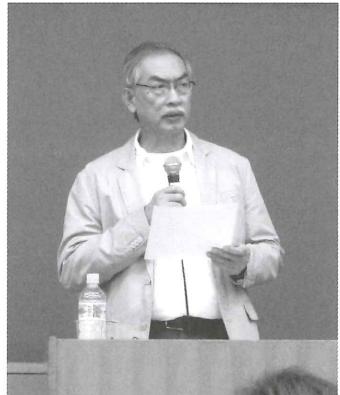
ます。また主題別ファイル314点は、この夏の整理作業で新たに利用可能となった分で、新聞・雑誌の切り抜きやメモ、世界各地から収集してきた文献や地図などを、「マラッカ海峡問題」「伏見稻荷」など様々なテーマごとにまとめたものです。

また、文庫関連では、鶴見さんの運動・研究仲間を中心に立ち上がった「鶴見良行文庫」委員会（代表=中村尚司・龍谷大学名誉教授）のご協力により、公開講演会も3度開催されています。まずは文庫開設を記念して開催された「アジアと日本と、市民社会のゆくえ」（2005年5月28日、講演：鶴見俊輔さん・池澤夏樹さん、パネル討論：内海愛子さん・熊岡路矢さん・中村尚司さん・宮内泰介さん・村井吉敬さん・吉岡忍さん）。このときの運動仲間・旅仲間のお話は『歩く学問ナマコの思想』（コモンズ、2005年）にまとめられました。次に、立教移転後に開催された「民間学再考—鶴見良行に寄せて」（2014年7月12日、講演：鹿野政直さん（民衆思想史））。鶴見さんの著作を丹念に読み解くことにより、彼の思索と行動のありようを浮き彫りにした鹿野さん。この講演を機に鶴見さんについて書かれた新作の出版が予定されています。そして、文庫の再開を記念して開催された「フィリピン社会の現在：鶴見良行を基点にして」（2015年7月3日、講演：ランドルフ・S・ダビッドさん（フィリピン大学名誉教授））。鶴見さんとフィールドワークを共にした経験を軸に、今日のフィリピン社会が抱える問題までを視野に入れて語られたダビッドさんの講演録は、センターの機関リポジトリ DSpace (<http://dspace.rcccs.rikkyo.ac.jp/>)からダウンロード可能です。

蓄積された膨大な知識と、人々が暮らす現場——鶴見良行文庫は、そのどちらも大切にし、歩き・読み・見つめ・触れ・聞き・味わい・考え・語り・書くことの喜びを知る全ての人のために鶴見さんが遺してくださいさったものです。ぜひご活用ください。



鶴見良行文庫 蔵書書架



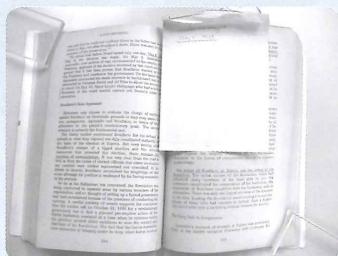
講演するランドルフ・ダビッドさん



ランディが毎週木曜日、Philippine Daily Inquirer 紙に連載している人気コラム "Public Lives" は今年で20周年を迎えた。バックナンバーはこちらから。 <http://opinion.inquirer.net/byline/randy-david>



Constantino, Renato, *The Philippines: A Past Revisited*. Quezon City: Tala Publishing Services. (文庫蔵書 ID : 2465) は書き込み・挿み込みが多い。184-185ページには、ある判決の日付について記述にゆれがあることを記したメモが挿まれている。日本語の該当部分はレナト・コンスタンティーノ著、鶴見良行他訳『フィリピン民衆の歴史Ⅱ 往時再訪2』、井村文化事業社、1978年、281(25)~282(26)ページ。鶴見さんは本書の11, 12, 14, 15, 18章の翻訳を担当し、全文を統一し、「訳者あとがき」も書いた。



フィリピン大学第三世界研究センターとアジア太平洋資料センター(PARC)による共同研究の報告書 *Transnational Corporations and the Philippine Banana Export Industry*, Commodity Studies No.2, Quezon City: Third World Studies Center, 1981 (資料ID:S9-0003). 扉には、鶴見さんの蔵書印が押されている。



## 公開講演会「フィリピン社会の現在：鶴見良行を基点にして」参加記

講演者：ランドルフ・S・ダビッド氏  
(フィリピン大学名誉教授、社会学)



石井 正子(立教大学異文化コミュニケーション学部教授)

「なぜ、鶴見氏は私たちにとって重要なのだろうか？」

鶴見良行の仕事が日本とフィリピン、そして東南アジアとの関係性構築の「基点（anchoring point）」を作ったことを述べようとする講演会の冒頭である。お話しは問い合わせから始まった。

フィリピンでは有名人もニックネームで呼ばれる。「ランディ」の愛称で親しまれているランドルフ・ダビッド氏は、1967年から2011年までフィリピン大学社会学部で教鞭をとった。フィリピンでは、1986年に民衆革命によってマルコス独裁政権が倒され、アキノ政権が誕生した。時代が大きく変わった局面で、ランディはテレビ番組のトークショーに登場し、一躍有名になつた。今では国民的に知られる存在である。

ランディは大学教員の時代に鶴見と知り合つた。1970年代前半、彼の学生に津田守（現在、名古屋外国語大学教授）がいた。ある日、津田が、「日本人のジャーナリストがレナト・コンスタンティーノに会いたがっている。ついては、紹介してくれないか」といった。レナト・コンスタンティーノは、ランディの義父であり、反帝国主義の立場から、アメリカや日本の新植民地主義を厳しく批判する著作を発表していた。ジャーナリストといつて津田が連れてきたのが鶴見であつた。のちに鶴見は彼の著作『フィリピン・ナショナリズム論上・下』（1977年）と『フィリピン民衆の歴史Ⅱ、Ⅲ、Ⅳ』（1978年、1979年、1980年）との監訳などを手がけている。

この出会いをきっかけに、ランディは鶴見とフィールドワークを共同で行うようになる。講演会でランディは、共に過ごした時間を振り返りながら、鶴見の魅力をあますところなく伝えた。鶴見が象牙の塔のアカデミズムに与せず、あえてジャーナリストを自称したこと、しかし、その観察と行動力は型破りな人類学者のようであつたこと、得意の料理をふるまつて場を和ませてくれたこと、ビールを飲み、煙草をふかしながら、驚くほど緻密なフィールドノートをつけていたこと、など。鶴見は人びとの出会いを楽しみ、彼／女らを「インフォーマント」とせず、共に新しいものを創造するパートナーとみなした。

1977年、フィリピン大学に第三世界研究センターのプログラムが開始された。ランディはプログラム開始当初から1992年まで所長を務めた。同センターは、独裁政権下にあったフィリピンにあって、強権的に進められた経済開発の弊害を批判する論考を数多く出版した。「開発による侵略（development aggression）」とまで批判されたこの現象に、日本のODAや資本が絡んでいたことは周知の通りである。鶴見の代表作の一つである『バナナと日本人』（岩波新書、1982年）の共同研究者となつたランディも、同センターからフィリピンのバナナ産業に問題提起する論考を発表している。

ランディがテレビのショーに出演したり、新聞のコメンテーターを務めたりするようになったことにも、鶴見の影響があつたという。鶴見は、知識が学問の世界で消化されるのではなく、ふつうの人びと共有され、社会に影響を与えることを意識して仕事をした。メディアに積極的に登壇することで、ランディもまた象牙の塔に閉じこもらず、広く社会に向けた発信を行ってきた。

しかし、なによりもランディが強調したかったことは、鶴見の仕事が東南アジアとの関係性を考えるうえで、日本人に批判的な内省を迫つたことではないか。高度経済成長期をへた日本は、1980年代にはODA大国になつていた。しかし、バナナの不平等な交換に現れているように、経済的繁栄は、東南アジアのふつうの人びとの犠牲のうえに成り立つてきた面もある。開発や経済発展が金科玉条のように唱えられていた時代に鶴見は違和感を覚えていた。ODAを供与することによって、東南アジアに経済的発展という変化をもたらすことは、本当に良いことなのだろうか。東南アジアとの不平等な関係性構築を見直すことによって変わらなければならないのは、日本人のほうではないか。こうしたことを伝えるために鶴見は、フィリピンの輸出加工区や川崎製鉄の「公害輸出」を取り材し、バナナを、そしてマグロを追つた。

東南アジアとの関係性を考えるうえで批判的な内省を促すことを、ランディは「鏡」というこ

とばを使って表現した。鶴見は東南アジアを紹介する仕事をたくさんした。しかし、それは東南アジアの紹介だけではなく、東南アジアを鏡として日本をみる仕事でもあった。

それでは、フィリピンの中央政府が置かれているマニラは、広大なバナナ園が広がり、紛争が蔓延する南部のミンダナオを鏡に自らを写し、その関係性を構築しなおすことはできるのか。このような質問を筆者はランディに投げかけた。革命的なことを起こすことはできないが、一人ひとりが他者と取り結ぶ不平等な関係性に自覚的になり、修正しようとすれば、変化を起こすことは不可能ではない、とランディは答えた。

立教大学社会共生研究センターの鶴見良行文庫では、鶴見の蔵書だけではなく、フィールドノートの一部を手にとってみることができる。フィールドノートを開くと、そこには鶴見が出会った風景と人びとが愛情深く記されている。緻密な描写には「一を聞いて十を知る方法」と称した鶴見の意気込みがうかがえる。新しい発見に喜び、問題に憤る鶴見の息づかいが感じられる。フィールドワークに携わろうとする人は、ぜひ一度訪れてほしい。



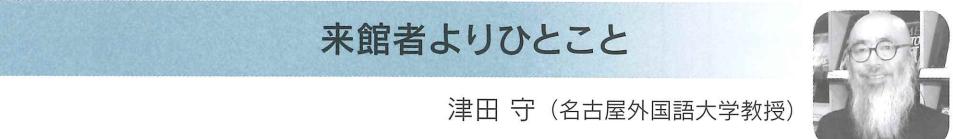
## 来館者よりひとこと

大橋 成子（ピープルズ・プラン研究所）

初めて共生社会研究センターを訪れた時、私は40年前の世界にタイムスリップしてしまった。学生時代に通った自主講座の公害原論、そして15年近く働いていたアジア太平洋資料センターで所蔵していた70～90年代の海外資料が整然と並べられているのを見た時、思わず胸が熱くなつた。黒人解放運動ブラックパンサーの機関紙から、戒厳令下のアジア各国で生命の危険にさらされながらも発行され続けた実に多様な出版物—フィリピンの地下共産党機関紙「アン・バヤン」④は、当時欠けていたバックナンバーをトランクに隠して日本へ持ち帰つたものだ。

先日、センターの招きでフィリピン大学のランディ・ダビッド名誉教授が来日した際、当時の運動資料を閲覧していた彼は感慨深げに呟いた。「戒厳令時代、読んだ後はすべて燃やしてしまうのが習慣だった。このような資料はもうフィリピンにも残っていないだろう…」そして彼は30年以上前に鶴見良行氏と行ったバナナの共同研究の本を見つけて大喜びだつた。

センターで丁寧に大切に保管されている資料は、国内外を問わず「ここでしか手に入らない」貴重な歴史の宝庫だ。スタッフの皆さんへの努力に感謝するとともに、次の若い世代へ歴史をつなぐためにも、センターが永遠に存続されることを心から願う。



## 来館者よりひとこと

津田 守（名古屋外国語大学教授）

センター初訪問の契機は、鶴見良行文庫に地図が発見されたことだった。彼が残した29冊のノートブックのある1頁に、普段の彼の端正な筆記体とは明らかに違う書きっぷりで、フィリピン大学（UP）キャンパス内のランディ・ダビッド（当時、同大社会学准教授、現名誉教授）の自宅への道順が描かれていた⑤。1982年9月から10月にかけて、鶴見がミンダナオを訪れたときのものであった。

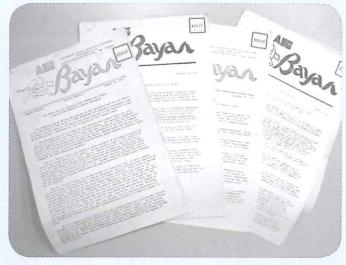
アーキビストのIzumiは、2015年4月9日、地図のpdfを添付してランディに問合せメールを出した。受け取った彼は、直ちにそれがRico（UP留学当時の私のニックネーム）によるものだとわかつた。

4月17日、マニラでの国際会議を終え、UP図書館⑥の用事も済ませた私は、せっかくここまで来ているのだから、と思いアポなしにランディ宅を訪ねた。幸い在宅の彼と旧交を温めることができた。7月のセンター主催公開講演会に招へいされ訪日することに話題が及んだ。すると「つい最近、Izumiからこれが届いたよ」とi-Phone画面に地図を示してくれた。

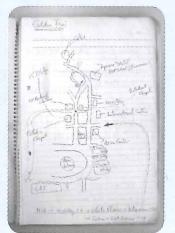
訪比を重ねてはいた良行さんが、ランディ宅に行つたことはなく、紹介者である私の都合もつかなかつたことから、彼のため道順を私が書きなぐった地図が再現されたのであった。不思議な偶然が重なつたとはいえ、センターは時空を超えた繋がりを蘇らせてくれた。



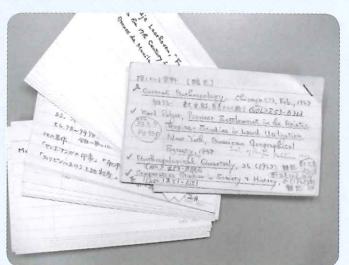
④ フィリピン共産党中央委員会発行「Ang Bayan」（英語版）、1971年8月～1990年2月発行分まで所蔵。71年8月24日発行のリリースは「我々はマルコス恐怖政治による独裁に対抗する全ての愛国的・革新的勢力と団結する」と宣言している。しかし約1年後の72年9月21日、マルコスはフィリピン全土に戒厳令を布いた。



⑤ フィールドノート「ミンダナオ'82 9/22～10/11」（ノートID:15）を開くとすぐにこの地図が目に飛び込んでくる。文庫には、鶴見さんが各地で購入した地図がたくさんあるが、一人の友をもう一人の友の家へ導くためだけに描かれたこの地図の持つぬくもりは格別だ。



⑥ 「モロ ミンダナオ」と見出しがつけられたカードの中に、「探している資料[鶴見]」と書かれた文献リストがある（カードID: 01-0233-01）。その中の一本、Melvin Mednick, *Encampment of the Lake : The Social Organization of Moslem-Philippine (Moro) People*, Research Series V, Philippine Studies Program, University of Chicago, 1965には赤字で「これは、国会になし」と書き込みがある。国会図書館にもなかったこの論文を、1982年9月25日「午前中、Randyの紹介で」訪れたUP図書館で読んだ、とフィールドノート15に書かれている。



## 【新しく公開しました】

### ◎中野区立江原小学校PTA運動関連資料

東京都中野区にある江原小学校のPTAが、1970年から76年にかけて、校庭の確保や校舎改築などの問題に取り組んだ運動の記録です。同PTAが自ら編纂した運動記録のほか、PTA新聞、運動のために収集した様々な資料など。

### ◎遠藤洋一氏旧蔵・ペ平連関連資料

ペ平連に参加し『ペ平連ニュース』や『週刊アンポ』の編集も担つた遠藤洋一氏が所蔵していた資料群です。1965年から1980年までの資料が存在し、大半は英語で書かれています。『Semper Fi』など各地で発行されていたGIペーパーのほか、ジョン・フォンダ来日(1971年)時の切り抜きなども。



書庫で資料整理作業に没頭するRAのふたり

### 【お問い合わせ・ご予約は】

#### 立教大学共生社会研究センター

〒171-8501 東京都豊島区西池袋3-34-1

電話：03-3985-4457 FAX：03-3985-4458

E-mail : kyousei@rikkyo.ac.jp

### 【2015年度 センター組織】

センター長 高木 恒一(立教大学社会学部教授)

運営委員会 高木 恒一(センター長、立教大学社会学部教授)

沼尻 晃伸(副センター長、立教大学文学部教授)

市橋 秀夫(副センター長、埼玉大学教養学部教授)

小野沢 あかね(運営委員、立教大学文学部教授)

町村 敬志(運営委員、一橋大学大学院社会学研究科教授)

リサーチ・アシスタント

柿沼 拓弥(立教大学大学院社会学研究科社会学専攻博士前期課程2年)

田崎 智菜(立教大学大学院文学研究科史学専攻博士前期課程1年)

宮本 韶(立教大学大学院文学研究科史学専攻博士前期課程1年)

吉田 みどり(立教大学大学院文学研究科史学専攻博士前期課程1年)

スタッフ 平野 泉・橋本 陽

### 編集後記

2015年度の前半は、センター所蔵資料ゆかりの方の訃報が相次ぎました。「ペ平連」事務局長として、解散時に自宅に持ち帰り長年大切に保存されてきた資料を寄贈してくださった吉川勇一さん(5月28日)、PARCコレクションの生みの親の一人である北沢洋子さん(7月3日)、そして「ペ平連」や「思想の科学」での活動を通して、センターの様々なコレクションに言葉と足跡を遺された鶴見俊輔さん(7月20日)…アーカイブズを読むことは、もはやこの世にいない人のメッセージに耳をすますことでもあると、しみじみ感じる今日この頃です。

(平野)



吉川さん寄贈分に含まれていた鶴見さんのスクラップブック

## センター利用案内

### 利用資格

とくにありません。立教大学共生社会研究センター所蔵資料の利用を希望される方は、どなたでもご利用いただけます。

### 開館時間

開館時間：

★ご利用には事前予約が必要です。

月～金曜日(祝日をのぞく)

10:00-12:00, 13:00-16:00

ただし、立教大学の一斎休業日のほか、資料整理などのため臨時に閉館する場合もあります。その場合はあらかじめセンターホームページなどでお知らせいたします。

### 閲覧

初回に簡単な利用者登録をお願いいたします。

資料は原則として閉架式です。

資料の貸し出しは原則として行いません。

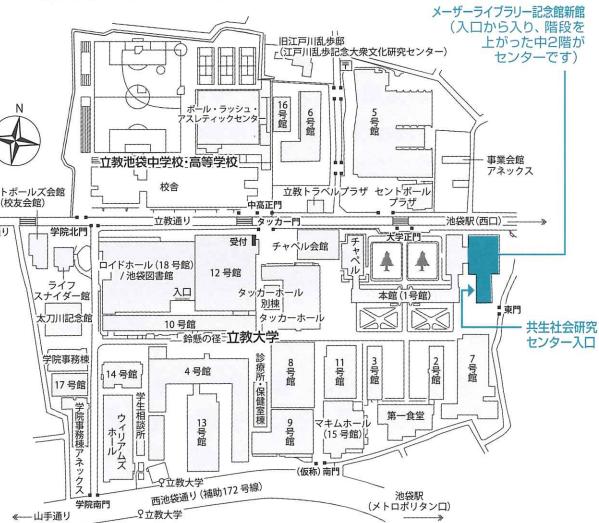
### 閲覧制限等

資料は原則公開ですが、プライバシー侵害の有無や資料保存の観点などから閲覧を制限する場合があります。詳しくは左記の連絡先までお問い合わせください。

### 【センターへのアクセス】

JR・私鉄・地下鉄各線「池袋」駅・

地下鉄「要町」駅から徒歩10～15分



**PRISM** — A Newsletter of Research Center  
for Cooperative Civil Societies — No.7, November 2015

3-34-1 Nishi-Ikebukuro, Toshima-ku, Tokyo, Japan 171-8501

Tel: +81-3-3985-4457 Fax: +81-3-3985-4458

E-mail: kyousei@rikkyo.ac.jp

<http://www.rikkyo.ac.jp/research/laboratory/RCCCS/>



**立教大学**  
**RIKKYO UNIVERSITY**